番組

(13:30)

能　半蔀（はしとみ）

（シテ）今井　清隆
（ワキ）村山　弘
（アイ）山下　守之
（大鼓）谷口　正壽
（小鼓）曽和　鼓堂
（笛）左鴻　泰弘
（後見）廣田　幸稔　金剛　永謹　宇高　竜成
（地謡）惣明　貞助　宇高　徳成　徳田　宣幸　重本　昌也　種田　道一　山田　伊純　松野　恭憲　廣田　泰能

狂言　清水（しみず）

（太郎冠者）茂山千五郎
（主人）松本　薫
（後見）山下　守之

―休憩―

(15:30頃)

能　鉄輪（かなわ）

（シテ）今井　克紀
（ワキ）有松　遼一
（ワキツレ）原　陸
（アイ）島田　洋海
（太鼓）前川　光範
（大鼓）谷口　正壽
（小鼓）曾和　鼓堂
（笛）左鴻　泰弘

(16:45頃)

（後見）豊嶋　幸洋　廣田　幸稔　宇高　徳成
（地謡）湯川　稜　重本　昌也　山田　伊純　豊嶋　晃嗣　和田　次夫　金剛　龍謹　惣明　貞助　宇高　竜成

主催　今井後援会　後援　京都新聞社

能　半蔀（はしとみ）

出典は源氏物語「夕顔の巻」。夕顔の花を介し源氏と夕顔の上が出逢った其の昔を回想する秀曲です。しかしこのシテを夕顔と云う一人の女性とするのか、あるいは夕顔の花の精と見るのか、其のおぼろげな風情が本曲の特徴でしょう。

最初、京都北山紫野雲林院の僧（ワキ）が登場。夏のあいだ供えた花の供養、即ち立花供養をとり行う旨を述べて脇座に着座。すると静かな囃子に誘われて一人の都の女（前シテ）が現れ、一ノ松にたたずむと「手に取れば」云々と一首の和歌をよむや、仏に新しい花を手向けます。

これを見た僧がその美しい花の名を尋ねると、これこそ夕暮れ時に咲く夕顔の花だと答え、続いてその女の名を尋ねると、私は生前五条辺りに住んでいて、その花の蔭から参った者で夕顔と申す者、と云うや否や立花の陰に隠れてしまい「中入り」です。

例により所の者（アイ狂言）が語ります。

源氏が六条の御息所（みやすどころ）へ通うその途中、五条辺りで夕顔の花の咲き乱れたる小家を観てあの花を折り参らせよと惟光に命ずると、その家の主夕顔が香をたきしめた扇に花を載せ一首の歌を添えて源氏に参らするのです。これを機に二人は結ばれるのですが八月十五夜、かの小家が余りに騒がしいので源氏が心当たりの屋に夕顔を誘い出したところ、その院内で夕顔の上は物の怪にとられ空しくなるのです。かの女は夕顔の亡霊に違いないので跡を弔うようアイは僧に告げて退場すると、後見により庵の作り物が舞台中央に出されます。

僧は教えの通り五条辺りに来て見ると、草の生い茂った家の内より女の声が聞こえ、やがて後見により引き廻しが下ろされるや半分のシトミ戸が開き、後シテ夕顔の上の登場となります。舞台に立ったシテはクセの部分で源氏とのなれそめを思い起こしつつ詞章に沿って舞います、そしてそれが引き続き序ノ舞へと昇華して行き、最後はまた夜明けと共にシトミ戸の内へ消えていくと僧は夢から覚めるのです。

使用面　前後とも　孫次郎（まごじろう）

能　鉄輪（かなわ）

京都北山の貴船神社が舞台。ワラ人形を五寸釘で木に打ちつけるというあの伝説にちなんだ話。本曲ではいきなり狂言方（社人）の登場。夫に捨てられた恨みから毎晩丑の刻詣でにやって来る一人の女に対し、社人が夢の中で受けた神のお告げをその女に伝えるべく一旦一ノ松の狂言座にて座して待ちます。

すると京都下京辺の女（前シテ）が笠で顔を隠し、唐織（からおり）の裾をまくり上げた壺折（つぼおり）姿で登場。舞台に入り正面へ直ったシテは夫の心変わりに対する口惜しい思いや後悔の念を述べ、ついには夫に罰が当たる事を祈るため貴船神社へと向かう「道行き」となり、ミゾロ池や鞍馬川の名称が不気味に謡われます。やがて神社に着いたシテは中央で床几に掛ると先ほどの狂言の社人が出、早速神の告げを伝えます。女は人違いだと否定するも、忽ち顔つきが変わるのを見た社人は急いでこの場を退散。すると美しい女人に見えたシテの髪の毛は突然逆立ち、辺りが風雲雷雨となるや、女は鬼となってあの男に思い知らせてくれんと激しく笠を投げ捨てて幕へ走り込み、中入りです。

入れ替わり下京に住む元夫（ワキツレ）の登場。このところ毎晩夢見が悪い彼は陰陽師安倍ノ晴明（ワキ）を呼び出します。晴明は彼を見るや占う迄もなく女の深い恨みを受けた顔で、すぐにでも命が危ないと告げると、早速祈祷の準備として後見方が祭壇の作り物を舞台正面にしつらえます。この棚には男の烏帽子と、後妻を表す髪の毛が枕を並べるように設置。神事の「ノット」を奏しワキが調伏の祈祷を始めると、又もや空かき曇り、雷鳴と稲光りで身の毛もよだつ恐ろしい気色となります。

すると悪鬼となった女の生霊（後シテ）が一ノ松に登場。頭上に載せた五徳には三本の炎が、手には打ち杖、そして上着は無く赤の鱗の着付けの侭の異様な姿です。面は本曲専用で赤い色の般若になる寸前の形相。やがて舞台に入ったシテは男女の臥す形の祭壇に上り、夫の心変わりを責めて後妻の人型の髪を掴んで激しく打ち、夫を連れ去ろうとしますが守護神に追い立てられついに退散して行きます。

使用面　前シテ　泥眼（でいがん）
後シテ　橋姫（はしひめ）